

Title	朱権の『瓊林雅韻』（上）
Author(s)	佐々木, 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 6 p.89-p.121
Issue Date	1991-12-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79551
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

朱権の『瓊林雅韻』(上)

佐々木 猛

『瓊林雅韻』は明太祖の第十六子朱権所編纂の曲韻書。可以算是第一部帶有注解的北音系統的韻書。但是『瓊林雅韻』の注解只有義訓没有音切。這部書是根据元代燕山人卓從之的『中州楽府音韻類編』而加以刊謬補缺的。所以『瓊林雅韻』不僅在語音系統上和『中州楽府音韻類編』近似、而且在「某声作某声」等的体例上也差不多完全做照『中州楽府音韻類編』。本文对『瓊林雅韻』『中州楽府音韻類編』這兩部曲韻書、進行詳細的研究。

目次

1. はじめに
2. 朱権の生涯
3. 朱権の著述、『太和正韻譜』など
4. 『瓊林雅韻』について、著録
5. 『瓊林雅韻』の体例
6. 『瓊林雅韻』の音系
7. 十九韻各論、附音節表
8. おわりに

附注

文献表

1. はじめに

北曲の中心は大都から南方へと移動し、宋代以来の南戲を圧倒して、やがて杭州がその中心地となっていく。そのような事態が決定的なものとなった元の泰定元年(1324)に、北曲の押韻の規範を示した『中原音韻』が江西の人・周德清によって編纂された。この書はそこに現れる元の北方音が現代の北方共通語の音系の特徴をほぼ備えていることから、広く人々に注目されてきた。

私も十数年前に『中原音韻』の研究に志したのであるが、反切などの音注が附されていないという『中原音韻』自体の情報不足のため、研究の方向を『中州音韻』や『交泰韻』など反切のある資料に転じた。ところがその間に中国における韻書の編纂は、先行する資料に増補改定を加え、これを換骨奪胎して自分の欲する形に改めていく、という方法が採られることがよく分かった。たとえば、王文壁の『中州音韻』を研究するためには『中原音韻』以来の曲韻の書を総ざらいする必要を痛感するようになった。つまり羅常培の「系統図」⁽¹⁾を点検してみる必要が出て来たのである。

そのうち『中州楽府音韻類編』については、従来見ることはできなかった原本の影印本が校訂本と校勘記とを附して刊行されたのを機に少し考えてみたが、このたび明の寧献王・朱権の編纂にかかる『瓊林雅韻』を見る機会を得たので、ここにこの書の性格について初歩的な考察を加えようと思う。

2. 朱権の生涯

『瓊林雅韻』の編者である朱権は明の太祖朱元璋の第十七子（一説に第十六子）で、洪武二十四年（1391）に寧王に封ぜられ、二年後に大寧に赴いた。

大寧は現在の遼寧省の西南部にある寧城の西に位置した大城で、『明史』巻百十七、諸王伝・寧献王権の条に、

大寧は喜峯口の外に在り。古えの会州の地なり。東は遼左に連なり、西は宣府に接して、巨鎮為り。帯甲は八万、華車は六千、属する所の朶顔三衛の騎兵、皆な驍勇にして善く戦う。（朱）権数たび諸王と会して塞を出で、善く謀るを以て称さる。

というように、北平の燕王とともに、北に対抗するために長城沿いに配置された塞王のうちの大藩であった。

太祖は宋元二代が封建を用いず、帝室が孤立して滅亡したのに鑑みて、洪武三年（1370）より要衝の地を選んで諸子をそこに封じ、外には辺境を鎮し、内には帝室を守らせた。太祖の子はすべて二十六人、太子朱標と末子朱楠とは封を得ず、その他の二十四人はいずれも王に列して封建された。その兵力は少ないもので三千人、多いものは二万人を数えた。⁽²⁾

その太祖が洪武三十一年（1398）に崩じると、嫡孫の朱允炆が即位し、翌年に建文と改元した。これが建文帝、又は恵帝であるが、その当面の急務は各地に封建されている諸王の処置であった。諸王の強恣は太祖在位中にすでに問題となっていたが、太祖が崩じたあとには一層緊要な問題となってきたのである。

建文帝は即位すると間もなく使者を送って諸王を偵察させ、嫌疑のあるものは処分することになった。早くもその年の八月には周王朱橚が罪を得て庶人におとされ、翌年四月には湘王朱柏が嫌疑を受けて自ら焚死し、齊王朱榑・代王朱桂はともに罪を得て庶人におとされ、また六月には

岷王朱桂も罪を得て廃せられた。⁽³⁾

燕王朱棣（太祖の第四子）は洪武十三年（1380）に北平に赴いたが、しばしば北に向かって元の余勢を征伐し、来降した士卒は太祖の命によってすべて燕王の指揮下にはいることになったので、その力は強大なものになっていった。そこで建文帝の即位とともに諸王の処置を議したが、実は燕王の処置が最大の問題となっていたのであった。燕王は自分も処分されるに違いないことを思い、建文元年（1399）七月に天子の姦臣を除くのを名目として兵を挙げ、二週間で河北をほぼ平定して、その兵力は数万に至った。

燕王ははじめ大寧の軍の強力であるのを見ると、これを得て遼東を断ち辺騎を味方につければほぼ態勢が整うと考えた。そこで単騎にて大寧に入り朱権に「事成れば、当に天下を中分すべし」と申し出て、燕王につくことを請うた。朱権はこれを容れて燕王の軍にはいり、燕王のために檄文を草し、王府の妃妻・世子はみなこれに従って北平に帰すると、大寧の城は空になった。⁽⁴⁾そしてその後置かれない。

一方、建文帝の側は燕王を庶人におとし、兵を發して征せんとするが、太祖の殺戮によって名将はほとんど尽き、老将耿炳文を残すのみであった。そうしてついに燕王の勝つところとなった。これが成祖永楽帝である。永楽帝が南京に即位すると（1403）朱権は大寧は早くに破壊されているので、江南の銭塘や蘇州に改封されんことを請うたが、かなえられず、翌年の永楽二年に南昌に封ぜられた。皇帝は親しく詩を作って送ったが、朱権は大いに不満であった。「靖南の功に恃み、頗る驕怨、怨望不遜なること多し」⁽⁵⁾という風で、彼の詩には次のようにいう。

頭を挙ぐるも長安の日は見えず、

世事は分明にして眼前に在り。

それゆえ封ぜられて間もなく彼が巫蠱して朝廷を誹謗していると告発する者があった。永楽帝がひそかに人を派遣して調べさせたところ、確かな証拠はなく、これで事は沙汰やみとなるが、この事から朱権は自らの境遇を思い知らされることになり、永楽帝の猜疑を避けるために「深く自ら韜晦し、居る所の宮庭は、丹彩の飾無く」「精廬一区を構えて、其の間に琴を鼓し書を著し」「日び文学の士と相い往還し、志を翫拳に託し、自ら臞仙と号す」るのであった。そして「晩節は益いよ翫拳を慕い、……生墳を縹嶺の上に建てて、数しば焉に往きて遊び」、現実の苦境から逃がれるかのように、神仙への憧れを強めて、「真を修め性を養う」ことに努めた。それゆえ別号は臞仙の他に涵虚子・丹邱先生などと称した。

次の英宗正統帝の十三年（1448）に七十一歳を以て南昌においてその生涯を終えた。献王とよくりなされた。⁽⁶⁾

3. 朱権の著述、『太和正音譜』など、

南昌に改封せられてからの朱権の生活は、「日び文学の士と相い往還し」「精廬一区を構えて、

其の間に琴を鼓し書を読む」というものであった。また「凡そ群書に秘本有れば、国中に刊布せざる莫し」という風に書物の出版にも心を注いだが、自らも多くの著述を残した。

『明史』本伝や『国朝献徵録』巻一などにその多くの著作が記録されている。

敕を奉じて輯めた『通鑑博論』二巻をはじめ、『漢唐秘史』二巻・『史断』二巻・『家訓』六篇・『寧国儀範』七十四章などがあり、『文譜』八巻・『詩譜』一卷がある。更に『神隱』『肘後神枢』各二巻・『寿域神方』四巻・『活人心』二巻・『太古遺音』二巻・『異域志』一卷『遐齡洞天志』二巻・『運化玄枢』『琴阮啓蒙』各一卷・『乾坤生意』『神奇秘譜』各三巻・『采芝吟』四巻があり、『国朝献徵録』は続いて、

其の他の注纂は数十種、経子・九流・星曆・医卜・黄治・諸術、皆な具われり。古今の著述の富なること、献王を逾ゆる者無し。

という。

また戯曲家としては雑劇の作品に『冲漠子独歩大羅天』『卓文君私奔相如』『淮南王白日飛昇』『周武帝辯三教』『齊桓公九合諸侯』『肅清瀚海平胡伝』など十二種があり、そのうち二種が伝存する。曲論家としての本領を示すものに『太和正音譜』二巻・『務頭集韻』四巻・『瓊林雅韻』一卷がある。

『太和正音譜』は前半の曲論の部分と後半の曲譜の部分とに分かれる。前者は北曲の体例、作家の流派を説き、作曲の方法・題材の分類・脚色(役者)の源流をめぐる資料を配列し、後者は周德清の『中原音韻』『正語作詞起例』中の「楽府共三百三十五章」に従って、そこに見える曲牌ごとに曲の実例を示して、正字・襯字を区別し、更に各字ごとにその声調を注記している。⁽⁷⁾この後半部分こそが『太和正音譜』の本領であり、この書が今日に伝わる最古の北曲の曲譜として重んぜられる所以である。

洪武年間の刻本が伝わり、『中国古典戯曲論著集成』にはこれにもとづく排印本が収められているが、その洪武三十一年(1398)の序文には次のようにいう。

余、清讌の餘に因りて、当代群英の詞章、及び元の老儒の作所を採摭して、声に依りて調べを定め、名を按じて譜を分け、集めて二巻と為す。之を目して太和正音譜と曰う。音を審らかにして律を定め、輯めて一卷と為す。之を目して瓊林雅韻と曰う。群語を蒐獵し、輯めて四巻と為す。之を目して務頭集韻と曰う。⁽⁸⁾以て諸を梓に寿して、楽府の楷式と為す。庶幾わくは好事に便ならしめて、以て学ぶ者の万に一を助けんとする耳。

この序の末尾に葫蘆形の印「洪武戊寅」と方形の印「青天忒鶴」とがあり、次に全書の「目録」がある。

次章において考察を加えることにする『瓊林雅韻』が北曲のための韻書であるのに対し、この『太和正音譜』は北曲の詞牌の典型を示した曲譜であった。両者あわせて作曲のための参考書としてよく機能しうるものであるといえる。それはちょうど『中原音韻』が前半の韻譜「正語之本、変雅之端」と、後半の作曲の奥義「正語作詞起例」とから成って、首尾整った一書を為している

のと軌を一にしているといえる。

4. 『瓊林雅韻』について、著録

『太和正音譜』の場合と同じく、『瓊林雅韻』の序文のあとにも葫蘆形の「洪武戊寅」の印と方形の「青天武鶴」の印とがあり、次に全書十九韻の「目録」がある。

「洪武戊寅」とは洪武三十一年（1398）であり、その閏五月に太祖洪武帝が崩じた年である。『太和正音譜』もこの年の序文を冠するが、当時朱権は二十一歳で、南昌に改封される五年前であった。

前章にも述べたように、洪武帝の崩じた翌年に早くも燕王が挙兵した。朱権はこの挙兵に参加し、燕王と天下を二分してこれを統べる意気込みを持っていた。このような時にあって現実社会に背を向け、神仙の志を持つようになっていたとは少し考えにくい。黄文実は他の根拠にもとずいて、『太和正音譜』は洪武三十一年よりも後の時期に増補された部分のあることを論じたが、⁽⁹⁾『瓊林雅韻』についても葫蘆形の印にいう「洪武戊寅」の年よりも後に完成した可能性のあることを指摘しておこうと思う。その際、明末清初の人・黄虞稷が明代の著作を集成し、あわせて宋金のものを収めた『千頃堂書目』の巻三・經部小学類にこの書を著録して次のようにいうのは一つの参考となろう。

寧献王権　　大雅詩韻七卷、
又　瓊林雅韻一卷、
正統辛酉序、

「正統辛酉」とは正統六年（1441）、朱権六十四歳の年である。⁽¹⁰⁾

『瓊林雅韻』の早い著録としては『晁氏宝文堂書目』がある。これは嘉靖年間（1522—66）における晁瑿の蔵書目録であるが、その巻下・韻書の項に、

洪武正韻（周府刻）
瓊林雅韻

と著録する。王折の『統文献通考』の「経籍考」には、

朱権、瓊林雅韻、無卷数

とある。

また嘉靖年間の大蔵書家であり、戯曲に関心の深かった李開先は「南北挿科詞序」に次のようにいう。

予少き時、文翰を綜理するの餘に、頗る心を金元の詞曲に究む。凡そ中原・燕山・瓊林・務頭の四韻書、太和正音・詞話・録鬼・十譜格・魚隱・太平・陽春白雪・詩酒餘音の二十四散套、…其の品類を辨じ、其の当行を識らざるは靡し。

清代にはいはって沈初らの『浙江采集遺書総録』丙集・六書類に、

瓊林雅韻一冊、刊本、

右、明の寧献王権撰、

卓氏の中洲韻を刪併し、十九字母を在して、各おの四声の下に系けり。

とあり、『四庫全書総目提要』は集部・詞曲類存目に著録して、

是の書、凡そ十九韻に分く、……中原音韻の十九韻と大略相い似たり、特だ其の名を異にする耳。

という。

そして清末の丁丙の『善本書室藏書志』卷四十・詞曲類・曲韻之属には、

瓊林雅韻、不分卷、

洪武戊寅刊本、璜川吳氏藏書、

明の寧王権、是の書を編みて十九韻に分く、……大抵は周德清の中原音韻の体例を襲いて其の名を易うる耳、前に自序有り、……洪武戊寅の葫蘆木印有り、卷首の鈴に璜川吳氏收藏の朱文の方印有り。

とある。

民国二十一年（1932）、『国学季刊』卷三の三に載った趙蔭裳の「中原音韻研究」卷上の第五章、曲韻派、その一、「陰陽の消滅と音注の増加」の条に、『瓊林雅韻』『詞林要韻』『中洲音韻』の三部の書を挙げ、『瓊林雅韻』について、

『瓊林雅韻』という書物は中国ではあまり見られない。ただ江蘇省立第一図書館に一部を蔵する。銭塘の丁氏旧蔵の書物である。私はこの書物を発見してより、一年の時間を費やしてやっと写し取った。

といい、

一、韻目の名称の改変、

二、平声は陰陽を分けない、

三、字数の増加、

四、注釈の増加、

の四点に分けてその特質を論じている。

最近では鈴木勝則「『瓊林雅韻』について（上）」が、テキストの事に触れて次のようにいう。

筆者が閲覧できたのは南京図書館蔵本と北京図書館蔵写本の2本のみである。……南京図書館蔵本は趙蔭裳氏が人に抄写を依頼したものと同一本である可能性が強い。縦約31cm×横約20cm。4冊。木版本。改装本と思われる。表紙に「八千卷楼珍藏善本」の朱印がある。……北京図書館蔵本は木版本ではなく、写本であった。1冊、84葉。表紙に「蘇州吳梅藏書」及び「献書人吳瓊青・南青捐贈」の青色印が押してある。……この北京図書館蔵抄本は南京図書館蔵本を底本として抄写されたものであることは疑問の余地がなからう。

「八千卷楼」とは銭塘の丁丙（1832～99）の別号である。丁丙は清末の蔵書家として知られ、

『八千卷楼目』『善本書室蔵書志』は彼の蔵書目録である。その蔵書は雜劇や戯曲の書が特に多く、後には江南図書館(今の南京図書館)に歸した。

5. 『瓊林雅韻』の体例

5. 1. 十九韻

『瓊林雅韻』の全書が十九韻に分かれることは、卓從之の『中州楽府音韻類編』や周徳清の『中原音韻』と同じである。しかしその韻目の名称は『広韻』あるいは詩韻のそれを襲用している『中原音韻』などのものを大きく変更している。これは旧来の詩韻のくびきを脱したともいうことができるが、『瓊林雅韻』の韻目はその二字で意味を成すように作られ、その多くは明の王朝を称えるものであると考えられる。趙蔭裳はこれを指して「頗る廟堂の気味有り」と評している。

- | | | |
|-------|------------|------------------------|
| 1、穹窿 | 大いなる天空 | (1、東鍾) ⁽¹¹⁾ |
| 2、邦昌 | 帝国の繁栄 | (2、江陽) |
| 3、詩詞 | 詩と詞の文学 | (3、支思) |
| 4、丕基 | 確固たる礎 | (4、齊微) |
| 5、車書 | 車と文学、天下統一 | (5、魚模) |
| 6、泰階 | 大宮殿のきざはし | (6、皆萊) |
| 7、仁恩 | 皇帝の恩愛 | (7、真文) |
| 8、安閑 | 安らかなる日々 | (8、寒山) |
| 9、觚鸞 | 觚(獸)と鸞(鳳凰) | (9、桓欽) |
| 10、乾元 | 万物創造の原理 | (10、先天) |
| 11、簫韶 | 舜の音楽、簫韶 | (11、蕭豪) |
| 12、珂和 | 白瑪瑙の調和 | (12、哥戈) |
| 13、嘉華 | 素晴らしい繁栄 | (13、家麻) |
| 14、碑瑯 | 碑碣と琅琊 | (14、車遮) |
| 15、清寧 | 静かなる日々 | (15、庚青) |
| 16、周流 | あまねき流れ | (16、尤候) |
| 17、金琛 | 金銀財宝 | (17、尋侵) |
| 18、潭巖 | 深い淵と高い峰 | (18、塩咸) |
| 19、恬謙 | へりくだる様 | (19、廉纖) |

5. 2. 〔○〕によって小韻を分けること

『瓊林雅韻』は〔○〕印によって小韻を区切り、その間に同音字を配列している。『中原音韻』などと同じく、音注は附されていない。

ただこの〔○〕印については、第6章の各韻を論ずる際に述べるように、誤って施した箇所や逆にこれを附し忘れた箇所もあるようであるので、音系全体の枠組を考慮に入れた上で、各々の〔○〕印について検討を加える必要がある。たとえば、4 丕基の入声作上声において、

105、隙競卻裕

105A、現煥闔吸翁歛滷檄

の二小韻を〔○〕印によって分けるが、『中州楽府音韻類編』4 齊微の入声作上声においては、「95、隙吸翁檄現」のように一つの韻となっており、『中原音韻』4 齊微の入声作上声も同じである（「103、吸隙翁檄現」）。また「『瓊林雅韻』総音節表」の「4 丕基（入）其一」に見るように、この二つの韻を一つに併合すれば、「93、吉」や「106、乞」「107、一」などの小韻と同様の分布を示す。以上のようなことから、105と105Aとの間の〔○〕印は誤って附せられたものと考えることができる。

5. 3. 小韻の順序

韻書の各韻目内における小韻の配列順序、或いはその層位的構造、の指摘は従来なされることは少なかった。⁽¹²⁾この『瓊林雅韻』は序文に

是に於て卓氏の著して中州韻を為せる有り。世の詞人歌客、以て準繩と為さざる莫きこと久し矣。予徐ろに之を覧るに、卓氏は工みなりと雖も、然れども舛誤脱落せること頗る多し。一日、琴書の清暇に因り、翰を操りて墨を濡らし、音を審らかにして韻を定む。凡そ用いるに切ならざる者は之を去り、舛る者は之を正し、脱する者は之を増して、自ら一家を成す。題して瓊林雅韻と曰う。

とあるように、卓從之の『中州楽府音韻類編』にもとづいて、これに増補改訂を加えて編集したものである。その小韻の順序も卓本のそれを襲っている。⁽¹³⁾いま1 穹窿（卓本は東鍾）の平声を例に示す。

『中州楽府音韻類編』		『瓊林雅韻』
		1、穹
		2、窿
		3、洪
〔陰〕	1、東	4、東
	2、中	5、中
	3、松	6、松
	4、公	7、公
	5、空	8、空
	6、翁	9、翁

	7、宗	10、宗
	8、鬆	11、鬆
	9、蹤	12、蹤
	10、崩	13、崩
〔陽〕	11、戎	14、戎
	12、龍	
	13、蒙	15、蒙
	14、籠	16、蹤
	15、膿	17、膿
	16、濃	18、濃
	17、從	19、從
〔陰陽〕	〔 18、通	〔 20、通
	〔 19、同	〔 21、同
	〔 20、冲	〔 22、冲
	〔 21、重	〔 23、重
	〔 22、邕	〔 24、邕
	〔 23、容	〔 25、容
	24、胸	26、胸
	〔 25、風	〔 27、風
	〔 26、馮	〔 28、馮
	〔 27、烘	29、烘
	〔 28、紅	
	〔 29、葱	〔 30、葱
	〔 30、叢	〔 31、叢
	〔 31、蓬	〔 32、蓬
	〔 32、烹	〔 33、烹
	31A 彭	34、雄
		34A 賊
		34B 控

『瓊林雅韻』は旧来の韻目の各称を新しく改めたが、その韻目に用いられた字を収める小韻はその韻の冒頭に配置することが多い。ここでは「1穹」「2窿」の二小韻がそれである。「1穹」は『中州楽府音韻類編』に存在しなかった小韻であるが、「2窿」は第12小韻として配列されていた。この1、穹窿においては更に「3洪」小韻を『中州楽府音韻類編』の第28小韻の位置から

冒頭の韻目名を表わす二小韻の次に配列している。

このような処置を除けば、『瓊林雅韻』における小韻の順序は卓從之のそれと全く同じく、序文にいう所をよく反映しているといえる。それは『中州楽府音韻類編』の韻末の二小韻「31蓬」「32烹」が陰陽の順を逆転していることをそのまま反映しているのである。

5. 4. 平声の陰陽

『瓊林雅韻』十九韻は内部においてそれぞれ平声・入声作平声・上声・入声作上声・去声・入声作去声に分かれる。そのうち「平声」の項は『中原音韻』のように陰・陽に分けられていない。それ故趙蔭裳は「これは『洪武正韻』以降、陰陽を取り消した最初の曲韻であり、陰陽消滅のはじまりである」という。⁽¹⁴⁾ 鈴木勝則は「『中原音韻』では陰陽の対立を成していた小韻が平声内に並存することになる」といい、これを「平声韻における同音衝突現象」とする。⁽¹⁵⁾ その「音節一覧表（上）」から一例をひらえば、たとえば「湯唐」の二字は全くの同音であるというのである。

しかし事実はそうではない。前節で述べたように『瓊林雅韻』は『中州楽府音韻類編』をもとにして編集しなおしたものであるから、小韻の順序もそれを襲うことが多い。平声においては従って『中州楽府音韻類編』の「陰」「陽」「陰陽」⁽¹⁶⁾のまに各小韻を配列していて、この各小韻を音図の形に整理すると『中原音韻』などと同じ北方共通語の音系を描くことができるのである。平声が一類であるということからすぐ連想するのは王文壁の『中州音韻』であるが、そこでは全濁音声母を立てることができ、去声には対応する全濁音声母の小韻が存在して、それなりに音系の整合性を持つことになる。⁽¹⁷⁾ しかし『瓊林雅韻』においては平声全濁音声母を立てることはできず、また対応する全濁音声の小韻も見い出すことはできない。それ故『中原音韻』などと同じく、平声は陰・陽の二類に分けて始めて音系の整合性を見ることができるのである。⁽¹⁸⁾

唯一の例外は1、穹窿韻の平声の冒頭の小韻である。

穹^{高也}節^{竹名}窮^{極也}究^也窮^{草名}蛰^{虫名}

叩^{地名又勞也}

周徳清の『中原音韻』はこれを陰・陽に二分する。

陰-13穹[●]芎[●]傾

陽-23窮[●]窮[●]蛰[●]叩[●]節

『中州楽府音韻類編』はこれらの字を収めない。一方、『洪武正韻』を見ると1、東の韻に、

29穹^{丘中切、高也}……

30窮^{渠宮切、極也}……究^也……窮^{竹名}蛰^{虫名}……一曰黍謂蟬蛰曰蛰^{叩地名又勞也}……節^{竹名}……

とあり、『瓊林雅韻』の小韻は

穹○節窮窮蛰叩

のように二分するべきであることが知られる。⁽¹⁹⁾ 前者が「陰」で後者が「陽」であることはい

うまでもない。

平声の陰の字・陽の字を同一小韻に収めるこの例外的措置をどのように解釈すればよいのであろうか。まず第一に考えるべきは『洪武正韻』の権威である。太祖洪武帝は「中華の回復」をなしとげると、洪武三年（1370）には早くも『元史』を完成させ、八年（1375）には敕撰の韻書『洪武正韻』を作らせた。これは従来の詩韻の枠組を大きく越えた革新的な韻書であったが、声調の組織は平・上・去・入の伝統的な四声のそれを踏襲している。朱権は太祖勅撰のこの『洪武正韻』をはばかって、『瓊林雅韻』の冒頭にこの小韻を置いて平声は陰陽に分けないことを強調したのであろうか。⁽²⁰⁾この点についてもう一つ注意すべきことがある。1、穹窿・平声の小韻の配列順序ははじめの三小韻を除けば『中州楽府音韻類編』のそれにそのまま従っていた。そのうち「1 穹」「2 窿」は韻目の名称であることによってここに提前しているが、次の「3 洪」は『中州楽府音韻類編』では第28小韻として「陰陽」の項にあり、その代表字は「紅」字であった。小韻代表字を「洪」に改めて1、穹窿韻の最初の部分に置いたのは、やはり「洪武」を賛揚しようとしたものであろう。

5. 5. 注解を加えたこと

『瓊林雅韻』は各字に意義の注解を施した最初の曲韻の書であるということができる。邵榮芬の『中原雅音研究』は次のようにいう。

『瓊林雅韻』は注解を持つ最初の北音系統の韻書であるといえる。しかし『瓊林雅韻』の注解は義訓のみで音注はない。

その注解は簡単なものである。そして先に引いた1、穹窿の冒頭の例を見ても分かるように、『洪武正韻』の注解と密接な関係を持っているようである。もちろん『洪武正韻』ばかりではなく『広韻』などによって加えられたであろうと考えられる箇所もある。増加小韻に収められる字について調査した結果は次の各韻の問題点について述べる箇所を参照されたい。また『中原雅韻』の注解とも直接の関係はないようである。

6. 『瓊林雅韻』の音系

6. 1. 声母、韻母、声調

『瓊林雅韻』は元の燕山の人・卓從之の『中州楽府音韻類編』をもとにして、これに増補を加えたものであった。そして『中州楽府音韻類編』は『中原音韻』の一稿本であると考えられるのであるから、『瓊林雅韻』の音系は実は『中原音韻』に代表される元代の北方共通音を表わすものであるといえる。

それならば声母の枠組は「早梅詩」の二十声母によっても大きな問題は生じない。「早梅詩」とは明代の通俗韻書『韻略易通』（正統七年、1442、雲南嵩明の蘭茂の撰）の巻頭に載せられた

五言絶句の声母表で、『韻略易通』はこの二十声母、

東 t 風 f 破 p' 早 ts 梅 m
 向 x 暖 n 一 ϕ 枝 tʃ 開 k'
 冰 p 雪 s 無 v 人 r 見 k
 春 tʃ' 従 ts' 天 t' 上 ʃ 来 l

によって纏められている。

一方、韻母は次のように整理される。

介音 十九韻	ϕ	i	u	iu
1. 穹 隆	uŋ	iuŋ		
2. 邦 昌	aŋ	iaŋ	uaŋ	
3. 詩 詞	ĩ			
4. 丕 基	ɔi	iɔi	uɔi	
5. 車 書	u	iu		
6. 泰 階	ai	iai	uai	
7. 仁 恩	ən	iən	uən	iuən
8. 安 閉	an	ian	uan	
9. 鰐 鸞	on			
10. 乾 元		ien		iuen
11. 簾 韶	au	iau	ieu	(uau) ⁽²¹⁾
12. 珂 和	ə	(iə)	uə	
13. 嘉 華	a	ia	ua	
14. 碑 瑯		ie		iue
15. 清 寧	ɔŋ	iɔŋ	uɔŋ	iuɔŋ
16. 周 流	ɔu	iɔu		
17. 金 琛	ɔm	iɔm		
18. 潭 巖	am	iam		
19. 恬 謙		iem		

「早梅詩」や韻母表の記号はすべて今かに記したものであり、詳細な検討を加えた再構音ではない。それ故「『瓊林雅韻』総音節表」においては韻母表の uŋ, iuŋ を「穹隆其一」「穹隆其二」などと書き表わすこととする。⁽²²⁾

次に声調は現代北京音などと同じく四種類が認められる。

平音・陰

平音・陽 入声作平声・陽

上声 入声作上声

去声 入声作去声

ここで問題になるのは「入声作平声」とされる字群が、平音を陰・陽に分けたあとそのいずれの側に属することになるのかという点である。『中州楽府音韻類編』は「入声作平声」のあとに「陽」という注記

を施しており、そこにすでに収められていた字については「陽」にはいると考えてよい。それらは中古音においては原則として全濁音声母を有していた字である。そこで『中州楽府音韻類編』にすでに存在していた小韻に増補された字の声母を調べると、156字のうち二三の例外を除けば、殆んど大部分は全濁音声母を有していた字である。それ故『瓊林雅韻』においても「入声作平声」は「陽」に属すると考えてよいであろう。

6. 2. 増加小韻及び増補字

『中州楽府音韻類編』ではなく『瓊林雅韻』に存在する小韻を「増加小韻」と呼ぶ。また『中州楽府音韻類編』になくて『瓊林雅韻』において増えている字を「増補字」と呼ぶ。その際、

『中原音韻』との関係は考慮に入れない（以下『中州楽府音韻類編』を卓本と略称し、『中原音韻』は周本、『瓊林雅韻』は朱本とそれぞれ呼ぶことにする）。

朱本の小韻数の情況は次の通りである。

1. 穹窿	53	増加小韻	7	そのうち周本に見えない小韻	1 ⁽²³⁾
2. 邦昌	105		9		2
3. 詩詞	26		0		0
4. 丕基	154		19		5
5. 車書	138		9		2
6. 泰階	90		4		1
7. 仁恩	119		8		2
8. 安閑	74		6		0
9. 端鸞	41		2		0
10. 乾元	86		3		0
11. 簫韶	169		30		8
12. 珂和	95		18		6
13. 嘉華	75		7		2
14. 磬瑯	65		2		2
15. 清寧	98		24		2
16. 周流	88		11		2
17. 金琛	44		3		0
18. 潭巖	53		4		0
19. 恬謙	45		2		1
合計	1618		168		36

朱本に見える小韻の数は凡そ1618で、周本の1626⁽²⁴⁾とほぼ同じく、卓本の1473⁽²⁵⁾にくらべて145少ない。このような数字を見ると卓本から朱本へという過程においては小韻の増加という側面のみに目を奪われがちであるが、実は卓本にあって朱本には存在しない小韻も7例あり、周本にあって朱本に見られない小韻は18例が認められる。たとえば卓本1、東鍾、上声では「41簪」「42隴」の二小韻が来母において対立を見せているが、朱本では「45籠」小韻に合併している。その結果、卓本の「42隴」小韻に相当する音節は朱本においては存在しない。

さて朱本における「増加小韻」は周本には存在するもの132と、周本にも見えないもの36、とに大別できる。そのうち周本にも見えない小韻は収められる字の配列順序や注解の文字などから判断して、『洪武正韻』（以下『正韻』と略称する）によってしかるべき位置に増補されたと考えられるものがほとんどである。一方、周本に存在する増加小韻は収められる字の数とその順序

朱本字数表(28)

	平	平入	上	上入	去	去入	小計
1	255	×	61	—	—	—	316
2	271	×	86	×	119	×	476
3	100	×	47	9	65	×	221
4	445	60	167	182	365	109	1,329
5	336	75	156	137	205	77	986
6	96	13	52	61	121	21	364
7	257	×	97	×	137	×	523
8	124	×	44	×	109	×	277
9	80	×	26	×	56	×	162
10	219	×	104	×	126	×	449
11	295	42	123	100	169	63	792
12	110	35	51	43	50	60	349
13	105	34	23	71	73	18	324
14	25	67	17	119	19	67	314
15	307	×	56	×	97	×	460
16	205	8	75	4	113	4	409
17	85	×	27	×	33	×	145
18	114	×	31	×	55	×	200
19	76	×	31	×	45	×	152
合 計							8,248

から見て、周本によって増補せられたであろうと推測できるものもあるが、また『正韻』によったであろうと考えられるものもある。その詳細については次章に譲る。

以上小韻について述べた事柄は各小韻に収められた漢字のレベルについてもまた同様にあてはまる。

次に各韻の所収字の数を示すが、私の試算では朱本に収められる字の総数は8248字である。⁽²⁶⁾卓本の総字数は4119字であるから⁽²⁷⁾、朱本に至って倍増しているが、単に卓本に字を加えているのではない。卓本にあって朱本に欠ける小韻に収められる字を除いても、朱本においては卓本所収字の69字を削っているのである。たとえば、4、丕基、平声「2歸」小韻に、卓本にはあ

た「規」字が収められず、5、車書、平声「22魚」小韻には、卓本にあった「興」字が収められていない。

最後に中古音と卓本（周本）との間に見られる対応規則からはずれる増補字のあることを指摘しておく。たとえば、4、丕基、入声作平声「60効覈核翻」は卓本にない「増加小韻」である。そのうち周本にあった「効」字は中古匣母徳韻の字で、これは規則に従って卓本（周本）の4、齊微にはいる。他の「覈核翻」字は匣母麥韻の字で、これらは規則に従えば卓本（周本）の6皆来にはいり、4齊微にはいる例はない。⁽²⁹⁾

7. 十九韻各論

以上の論述にもとづいて各韻ごとに『瓊林雅韻』の総音節表を示し、それぞれの問題点を特に

卓本との異同に焦点をあてて論ずることにする。その際、卓本と周本の異同や卓本自身の問題であると考えられる点については取り上げない。

まず音節表の構成法、或いは凡例の如きものを記す。

声母は唇音、舌音、歯音、牙喉音の順に再分類した「早梅詩」による。

韻母は「1、穹窿、其一」「其二」などと表わす。「其一」は un、「其二」は iun と読みかえることは容易であるが、この書が元代の卓本をもとに増補されたものであることを考えると、実際の音価を示すことはさほど重要ではないと考えるので、あえて音価を示すことはしないでおく。

声調は平声・陰、平声・陽、上声、去声の四類を立てる。実際の調値を考える根拠はこの書には見い出せない。

音節は小韻代表字、つまり各小韻の冒頭の字によって示す。

うしろの数字はその小韻の占める順序を示す。

() 印を附した小韻はそれが卓本にないことを表わす。

[] 印を附した小韻はそれが卓本・周本いずれにもないことを表わす。

○ は該当する小韻が卓本にあることを表わす (原則として周本にも存在する)。

◎ は該当する小韻が卓本にはないが周本には存在することを表わす。

1. 穹窿

○ 平声

上述の通り冒頭にあつて韻目を表わす小韻、「1 穹穹窮窮登叩」は「1 穹」「2 穹」の二小韻に分ける。「3 穹」は韻目名として、また「4 洪」は『洪武』を賛揚して韻目の次に提前している。

「5 東」以下は卓本の小韻の配列順序と同じで、〔陰〕〔陽〕〔陰陽〕の順に並べられている。その〔陰陽〕の項にある「27 胸」は対を成すべき陽の小韻を隣接して持たず、卓本はこの陽の小韻を欠く。周本に「熊雄」の小韻があり、『正韻』には「雄胡容切、飛曰雄雄、走曰雄雄、借為英雄字、熊獸似豕」の小韻がある。朱本はこのいずれかによってこの韻の末に「35 雄雄雄、熊獸名」の小韻を増補しているであろう。

「33 蓬蓬凡鬚蓬彭棚朋薛鵬棚」

「34 烹」

のペアは陰陽の順序が逆転しているが、卓本もこの箇所を次のように配列する。

31 蓬蓬

32 烹

31A 彭棚鵬 (上四字収)

「31 蓬」が陽、「32 烹」が陰で、「31A 彭」は「31 蓬」と一つに合併すべき字群である。この卓本は他の韻からその韻に移して来た字を、本来の韻に収めている字から区別して「収」という注記を施す。ここでは「烹」「彭棚鵬」の四字が「収」とされているが、これは本来十五庚青の韻

韻 母 声調 声母	1. 穹 窮 其一				其二			
	平・陰	平・陽	上	去	平・陰	平・陽	上	去
冰 破 梅	崩 14 烹 34	蓬 33 蒙 5	(葦) 43 捧 42 蟻 38	匪 68 夢 64				
風 無	風 28	馮 29		鳳 55				
東 天 暖 来	東 5 通 21	同 22 膿 18 籠 17	董 36 桶 39 膿 50 籠 45	困 58 桶 62 〔困〕 70 弄 57		濃 19 隆 3	○	
早 從 雪	宗 11 葱 31 鬆 12	叢 32	總 40	綰 66 圀 54	蹤 13 松 7	從 20		綰 67 圀 60
枝 春 上 人					中 6 冲 23	重 24 戎 15	腫 46 籠 44 冗 47	〔衆〕 63 〔衆〕 71
見 開 何 一	公 8 空 9 烘 30 翁 10	洪 4	(拱) 53 孔 37 永 41 〔翁〕 51	貢 56 困 59 困 69 困 61	(穹) 1 胸 27 邕 25	(筇) 2 (雄) 35 容 26	(洵) 52 擁 48	困 65

にあるべき字が音変の結果一東鍾のこの箇所に「収」められることになったことをいう。その間の処理が十分になされないためにこのような陰陽の逆転が生じたのであろう。そして朱本は卓本の「31A 彭棚鵬」を「31蓬蓬」に合併したが、小韻の順序はそのままで改めることはしなかったのであろう。

韻末に「35A 賊、似廣而小、与松同音」「35B 倥、倥、童蒙也、与空字音」

の二小韻があるが、注記によって見れば明らかに韻末の増補字である。それぞれ「7 松」「9 空」に合併するべきである。この二字はいずれも周本にはないが、『正韻』は「松息中切」小韻に「賊似廣而小、能捕雀」とあり、「空苦紅切」小韻に「倥無知、揚子、倥、童蒙」とある。朱本は恐らく『正韻』によって増補したのであろう。

○ 上声

卓本では「41簀₁」「42隴₃隴₃」、周本では「41隴₃隴₃」「42簀₁隴₁」という風に、もと来母一等の字と来母三等の字とは、別の小韻を形成していたようであるが、朱本ではそれを一つに合併しているようである。

「45隴₁隴₁隴₃隴₃簀₁」

『正韻』も liun と lun を区別せず小韻に合併している。朱本は『正韻』の「隴₁力重切隴₃驚隴₃隴₃隴₃隴₃」の中からしかるべき字を順に採用し、最後に「簀」字を卓本から収めたのであろう。

「51蓊滂壘」の小韻は卓本・周本いずれにも存在しない。『正韻』には「蓊₁烏孔切滂壘翁」がある。

朱本は『正韻』からこの順番に三字を取り出しその韻末に増補したのであろう。

○ 去声

この箇所は欠葉があるため一小韻も確認できない。しかし朱本は卓本をそのままの形で増補したものであり、『詞林要韻』は朱本にもとづいてそれに増補改訂を加えたものであった。しかもこの箇所を卓本と『詞林要韻』について比較対照してみると、小韻の順序は唯一の例外を除いて全く同一であった。⁽³⁰⁾それ故これらを参照して朱本にもとはあったであろう各小韻を補うことができる。いまかりにそれらの小韻を□印によって示す。小韻の配列順序を表わす数字もかりに附したものである。

2. 邦昌

○ 平声

1、穹窿の去声の部分の欠葉は本韻の冒頭の「1～殭釭」に及ぶ。卓本にあった「邦」「康」の二韻が見えないが「邦」は韻目でもあるため必ず存在していたと考えられる。また「康」小韻は卓本では〔陰〕の項に「9 喪」「10 康」「11 光」の順序で配列されるが、朱本ではちょうどこの箇所に「康」小韻のみがなくなっている。『詞林要韻』はこれを冒頭に提前して「1 邦」「2 康」「3 江」「4 霜」の順序に配列している。朱本もこの通りであったとすれば、「邦」「康」の二小韻はともに冒頭の欠葉部分に存在していたといえることができる。

韻末は〔陰陽〕の項の体例に合わない。

47 穰

48 臧

49A 徃

48B 塘

「47 穰」は卓本では〔陽〕の項にあって「14 良」「15 穰」「16 忘」の順に配列されている。これが正しい処置であるが、朱本ではこの配列から「穰」小韻を取り出して韻末に加えたのである。

「48 臧善也臧吏受賄也戕戕也又地名牂盛兒」は卓本にない小韻である。周本には「臧臧」があり『正韻』には「臧茲郎切善也…臧吏受賄…戕材也…牂…盛貌…將…葬…」がある。朱本は『正韻』の順に字を取ったのであろう。注解も殆ど同じ語句を用いている。

「48A 徃急行兒」は一字のみの増加小韻である。この字は卓本・周本・『正韻』いずれにも収められないが、『広韻』の「王雨方切」小韻に「徃急行」とある。ここは「徃急行兒与王字同」とするべきであらう。

「48B 塘玉名与唐字同」も韻末の増加字である。「34 唐」小韻に合併させるべきである。

○ 上声

小韻の配列順序は卓本に同じであるが、卓本の韻末にある「仰」小韻（一字のみ）を「50 養養軼養仰蚌」に合併している。他にも「養蚌」の二字は朱本の増補字である。

韻母 聲母	2. 邦 昌 其一								其二							
	平・陰		平・陽		上		去		平・陰		平・陽		上		去	
冰 破 梅	○ 鎗	23	傍 忙	24 11	榜 蟒	66 69	謗 胖	101 77								
風 無	方	29	房 亡	30 13	倣 罔	62 63	放 望	95 90								
東 天 暖 來	當 湯	10 33	唐 囊 郎	34 17 15	黨 倘 〔囊〕 朗	68 67 73 70	蕩 盪 浪	97 96 98		娘 良	14 12		兩	52	(釀) 亮	84 80
早 從 雪	(臧) 倉 喪	48 43 8	藏	44	◎ 類		藏 喪	100 76	漿 槍 湘	5 37 35	牆 詳	38 36	獎 搶 想	51 54 55	匠 ◎ 象	87 78
枝 春 上 人									章 昌 商	3 31 4	長 穰	32 47	掌 敞 賞 壤	56 59 61 60	仗 唱 上 讓	85 88 82 83
見 開 何 一	崗 ○	7	航 昂	16 18	〔慷〕 ◎	74	(杠) 亢 行 (益)	104 103 99 102	殭 羌 香 肴	1 25 21 27	強 降 陽	26 22 28	講 強 響 養	49 53 58 50	絳 巷 恙	75 86 79

其三							
平・陰		平・陽		上		去	
莊 認 雙	6 19 2	床	20	爽	57	壯 創	81 89
光 匡 荒 汪	9 39 45 41	狂 黃 王	40 46 42	(廣) 謊 枉	72 71 64	誑 壙 〃(況) 旺	91 105 92 93

〃(晃) 94

本韻も韻末に増補小韻が並ぶ。

「72廣_{大也}」小韻は卓本にないが、周本「72廣」或いは『正韻』「廣_{古況切、大也}」にもとづいて増補したのであろう。

「73曩_{昔也}」「74慷_慨」の二小韻は卓本、周本ともに収められない。『正韻』の「曩_{乃黨切…昔也}」「亢_{口黨切…慨…亦作慷}」にもとづいて、それぞれ増補したのであろう。

韻末の「74A悅_{驚兒}」は「71誑」小韻と重複する。「与誑字音同」という注記を加えるべきであらう。

「隣_{tsaŋ 上}」「沆_{haŋ 上}」の二小韻は卓本にないが周本には存在する。これらが朱本にないことは朱本が卓本にもとづくことを物語る。

○ 去声

ここでは増加小韻は韻末にではなく、いわば韻中にある。あわせて五小韻を増補しているが、いずれも周本に存在しているものである。そのうち「94晃_{明也}幌_{帷輟也}梲_{書床}滉_{水深貌}兒」は、卓本では上声にあった小韻「72誑晃」から周本に従って「晃」字を去声に移し、『正韻』によって増補したものであろう。『正韻』では上声17養に「晃_{戸廣切…明也…梲_{誑書牀…幌_{帷輟}滉_{水深貌}}」とある。全濁音声母を持つ上声の字は近世北方音においては清音声母の去声になるという原則に沿って朱本はこれらを去声に移したのであろう。}

朱本では○印によって分けられている

89創_{始也造也、剏_{初也}}

89A愴_{悽也、滄_{寒也}}

は卓本「創剏愴」や『正韻』「創_{楚浪切…始造也…剏_{初也…愴_{悽愴}滄_{寒也…倉…}}」によって一つに合併するべきである。}

3. 詩詞

本韻は韻目を表わす字の収められた小韻が冒頭に来ることはない。それ故、小韻の順序はすべて卓本と同一である。

○ 平声

「9斯」小韻の「𠂔」「𠂔」「𠂔」の三字が解読不可能である。この小韻に卓本は「私」「𠂔」字があり、周本は「思」字があって、朱本には収められない。解読不可能の三字は或いはこれらの字であらうか。

○ 上声

韻末に「17A峙、具也、又峻峙、与时同」がある。注記に従えば「11紙」小韻に合併するべきであるが、「峙」は全濁音声母の上声字であり、のちの北方共通音においては全清音声母の去声となる字である。

韻 母 声母	3. 詩 詞				3. 詩 詞 (入)		
	平・陰	平・陽	上	去	平	上	去
冰 破 梅							
風 無							
東 天 暖 来							
早 從 雪	髭 雌 斯 2 5 9	慈 詞 6 10	子 此 死 15 14 16	字 次 似 23 22 21		塞 18	
枝 春 上 人	芝 差 施 1 3 7	時 児 8 4	紙 齒 史 爾 11 17 13 12	至 翹 是 二 25 24 20 26		澁 19	
見 開 何 一							

4. 丕基

○ 平声

韻目を表わす字のある小韻を冒頭に移してはいない。「基」の字は第一小韻「機」に収められているが、これは卓本・周本においてすでに本韻の冒頭にあったものである。

「3齋壘」は韻中の増加小韻である。そのうち「壘」字は『正韻』に収められない。一方周本はこの箇所は「1機」「2婦」「3壘」の順に配列して、第三小韻には「壘齋擠躋」の四字を収めている。この小韻は恐らく周本によって増補したのであろう。

「10微」小韻に「微」「維」「惟」「唯」の四字を増補している。そのうち「維」「惟」の二字は卓本では朱本の「22閨」に相当する小韻に収めるが、周本はこの「10微」小韻に収めている。また『正韻』にも「微無非切、薇微惟維唯澁帷」とある。

同じく「遺」字は卓本では朱本の「22閨」小韻に相当する小韻に収められるが、朱本は「30移」に収めている。これは、周本・『正韻』に同じである。

〔陰陽〕の項の「27希」「28花」、「29奚」

「30移」の各小韻の配列順序は卓本も同じであるが、「27希」「29奚」、「28衣」「30移」に並べかえると陰陽の対を成して正しい順序となる。

「31啼」「32梯」は卓本に従って「31梯」「32啼」の順に改めた方が陰陽の順に対を成して是に近い。

韻母 聲調 聲母	4. 丕 基 其一				其二			
	平 · 陰	平 · 陽	上	去	平 · 陰	平 · 陽	上	去
冰 破 梅	筭 7 紕 45	脾 46 迷 12	彼 75 (否) 86 米 73	蔽 130 [譬] 146 謎 131	杯 6 披 35	裴 36 梅 14	○ 美 74	背 123 配 142 妹 140
風 無					非 23	肥 24 微 10	[筐] 85 尾 62	吠 114 未 111
東 天 暖 來	低 4 梯 32	啼 31 泥 13 犁 11	底 70 體 69 (你) 88 禮 67	帝 122 替 121 殢 118 利 124				
早 從 雪	(齋) 3 妻 17 西 5	齊 18	濟 68 洗 71	霽 120 砌 125 細 126				
枝 春 上 人	知 9 答 40	池 41	耻 83	致 137 世 138				
見 開 何 一	機 1 溪 25 希 27 衣 28	奇 26 奚 29 移 30	蟻 64 起 72 喜 82 椅 63	計 129 氣 119 (戲) 144 異 117				

其三			
平 · 陰	平 · 陽	上	去
(堆) 39 推 42	頽 43 雷 15	腿 78 (餒) 87 壘 77	對 128 退 134 內 143 淚 139
崔 44 (菱) 47	○ 隨 49	嘴 80 髓 84	醉 127 翠 116 葳 135
追 7 吹 32	鎚 34 誰 16 (麤) 48	(捶) 89 水 81 藥 79	墜 136 (吹) 145 睡 133 銳 132
歸 2 魁 37 灰 19 威 21	葵 38 回 20 開 22	鬼 65 悔 66 委 76	貴 113 簀 141 會 115 胃 112

韻 母 聲 調	4. 丕 基 (入) 其一					
	平		上		去	
冰 破 梅	ㄲ逼	57	必 匹	96 92	蜜	148
風 無						
東 天 暖 來	狄	54	的 滌	99 104	(慝)	154
					立	150
早 從 雪	疾	52	啣 七	95 91		
	夕	53	昔	97		
枝 春 上 人	直	51	質 尺	90 98	日	147
	十	50	失	94		
見 開 何 一	及	55	吉 乞 隙 (一)	93 106 105 107	劇	153
					場	151

ㄲ〔弼〕 59

(入) 其三		
平	上	去
或	56	國 101

(入) 其二		
平	上	去
	筆 102	墨 149
	德 100	勒 152
(鍼) 58	〔則〕 109	
(効) 60	ㄲ黑 103	

ㄲ〔赫〕 108

「39堆積也又聚土也銚蒸餅也」は卓本になく、周本には〔陰〕の項にある。一方『正韻』は「堆都回切聚土…」字は収めるが「銚」字は収めない。朱本はこの小韻を周本によって増補したのであろうか。

「42推進也」小韻は周本にない。『正韻』には「推通回切…進之也」とある。

「44崔催衰摧摧」と対をなす陽の小韻がない。卓本・周本においては「摧」字がこれに相当するが、この字は朱本においては陰の小韻「44崔」にはいっている。小韻中の字の配列順序は「陰陰陰陽陰」となっていて、1、穹窿の冒頭のように、小韻を区切る○印のつけ忘れであるとして陰陽に二分することはできない。一見陰陽の対立の消滅を示すかのようであるが、今日の北京音も「催 cuī」「摧 cuī」は全くの同音であることを考えると、この「摧」字は早くに陰であったようである。

平声の韻末は次のように並んでいる。

「47菱」(增加小韻)

「48麤生」 (增加小韻)

「49隨」(卓本は〔陽〕の項「15雷」「16誰」兩小韻の間にあった。)

これを解釈すれば次のようになろう。

朱本は韻末に「47菱」「48甦生」を増補したが、〔陽〕の項に「47菱」と陰陽の対を成す「隨」小韻があるのに気づき、これを「49隨」の位置に移動した。卓本が平声を〔陰〕〔陽〕〔陰陽〕の三類に分類するその意味を重視したからであるが、それならば更に「48甦生」を〔陽〕の項に移すべきであった。

○ 入声作平声

韻末に三つの増加小韻がある。

58 𧸛 鳥𧸛魚𧸛 害也益也 (○印の字は周本にある字)

59弼輔也

60 効料也 幸也 覈考實也 核果實也 翮鳥翼

このうち「59弼」は周本にもない小韻である。『正韻』二質「弼薄密切轄也」によって増補したのであろう。卓本にはもと「57逼」小韻があるが、これは『正韻』においては七陌、「必歴切、迫也」とある。この二字は『正韻』ではそれぞれ別の韻に収められているので、「弼」を独立の小韻として増補したのであろう。「57逼」小韻に合わせるべきであると考える。

「60効」小韻の字の順序は『正韻』と同じである。「効胡得切、推竊罪人也…覈考也實也…核…又果中実翻鳥之効羽」。

一方「58賊」の字は『正韻』にない。『広韻』二十五徳に「賊盗也…昨則切、**賊**烏賊魚…」とある。

○ 上声

卓本は「69彼」に続いて「70妣」字がある。周本はこれを二小韻であると考えて「71妣比_レ」
「79彼鄙_レ」とし、前者に二字、後者に一字を増補した。朱本は一小韻であると考えて「彼」
「妣」二字を併わせ、これに七字を増補したのであろう。

75彼比也此母發曰此批不成聲也彼邪也七七首也髀股也鄙陋也俾使也比並也

一方『正韻』には次のようにある。

彼補委切對比之稱彼邪也…俾使也…髀股骨也…七…七首…比並也…批考批…批不成聲也…鄙…陋也…

韻末に五小韻が増補されている。

85籛匪斐榧非

86否圯痞齏

87餒鯁

88你禰

89捶

このうち「85籛」は周本にもおさまられない小韻である。

○ 入声作上声

「105隙歛卻裕」

「105A覲煥闔吸翕歛滷檄」

はその間の〔○〕印を誤りと考え、一小韻に合併するべきである。卓本は「隙吸翕檄覲」の一小韻となっている。

韻末に三つの増加小韻がある。

107一教之始也乙千名

108赫高明之兒

109則法則也

このうち「108赫」「109則」は周本にも見えない小韻であるが、『正韻』七陌に「赫呼格切…高明顯盛貌…」「則子德切法則」とある。

「107一乙」について、卓本は「易」など24字とともに「入声作去声」の項に収めるが、周本は「一」字のみを「入声作去声」の韻末に重出している。朱本は周本とは異なり「入声作上声」に「一乙」二字のみを収め、「入声作去声」の項の該当小韻にはこの二字を収めない。

○ 去声

韻末に三つの増加小韻がある。そのうち「144戲系係」「145吹喙」は周本にあり、所収字の数もその配列順序も周本のままである。「146譬屁」は周本にも見えない。

○ 入声作去声

韻末に増加小韻「154慝惡也」がある。周本にもなく、『正韻』には「忒傷德切」の小韻に「慝惡也…」とある。透母声母をもつ入声字は卓本・周本において「入声作去声」となる例は一字もなく、この「慝」字は特異な例外となっている。ちなみに現代北京音は〔t'ə〕の去声である。

5. 車書

○ 平声

卓本・周本とも冒頭の小韻は「1居」「2諸」「3蘇」である。朱本は韻目を表わす字の収められる小韻を冒頭におくために、「2書」を〔陰陽〕の項から取り出して前に移し、もともと韻の冒頭にあった第1小韻においても「車」字を小韻代表字の位置に移している。

○ 入声作去声

「51佛」「52局」の間に卓本は「鵲」小韻があるが、朱本は「45鵲」に合併している。

韻末に増加小韻「53怵破音也」がある。周本にも収められないが、『正韻』二質に「出尺律切…怵…破音也」とある。朱本はこれによったのであろう。

○ 上声

卓本では「63数」「64楚」「65阻」のように配列している「楚」小韻を「79浦」「81補」の間に移動し、「礎」「礎」の二字を増補している。

また「79浦水波圃種菜曰圃譜録也普博也大也溥大也鵠鳥名」「81補完衣也」の二小韻は、卓本では「浦圃譜補」「普溥」のように二分している。周本では「補浦圃鵠」「普溥譜」となっており、この二小韻の分け方は三本とも異なっている。『正韻』によれば「普傍五切…博也大也浦水質…溥大也…」「補博古切礎衣也…譜音録圃種菜曰圃」とあり、前者が中古音の滂母を、後者が幫母を代表している。一方、現代北京音は「浦圃譜普溥」を〔p'u〕上声に読み、「補」を〔pu〕上声に読む。「鵠」字は去声であるために暫く除くとすれば、朱本の二小韻の分け方は現代北京音とよく合うことになる。

韻末に「82謳優優疾也」「83咀嚼也齟齬齟齬」の増加小韻がある。いずれも周本に存在する小韻であるが、収められる字数は異なっている（「謳去」「咀」）。『正韻』に「謳於語切、優優」とあり、朱本は「82謳」小韻に「与語音同」と注記するべきであった。

また「齟」字は『正韻』「偶許切」の小韻に収められて「齒不相値」と注されている。朱本も「54語」小韻に収めて同じ注記をつけている。疊韻の語「齟齬」を形成するもう一方の字「齟」は『正韻』の「壯所切」小韻に収められ「齒不相値曰齟齬」という注記がある。現代北京音も〔tsiu〕であることから朱本のこの小韻は「83咀嚼也齟齟齬」に作るべきである。

○ 入声作上声

韻末に六つの増加小韻がある。

「100畜六畜觸触也矗直也齊齊也」小韻の「觸」字は周本では「東觸」の小韻に収められている。朱本は『正韻』「昌六切」の「畜与畜同…觸触也…矗直也齊齊也…」によって増補したのであろう。

「101督篤」は周本にこのままある。

「102屋劇沃元杌」は卓本においては「屋」一字のみの小韻を〔入声作去声〕の項におく。周本はこれを〔入声作上声〕に移し、更に「沃元」二字を増補した。一方、朱権の『太和正音譜』「麻郎兒」は王実甫の『麗春堂』第三折「生居在華屋、今日流落在丘墟」を例に挙げ、この「屋」字に「作上声」と注を附している。朱本が「屋」小韻を〔入声作上声〕に収めるのはそれなりの

韻 母 平聲調 声母	5. 車 書 其一							
	平・陰		平・陽		上		去	
冰破梅	逋	12 38	蒲	39 17	補	81 79 70	布	129 132 124
風無	膚	36	浮	37 16	甫	68 67	附	119 122
東天暖来	都	11	徒	18 19 20	覩	73 71 74 72	杜	118 126 120 125
早從雪	租	13 27 4	殂	28	祖	65	做	131 130 123
枝春上人	初	25 5	雛	26	阻	64 80 63	助	115 113
見開何一	孤	9 10 40 23	胡	41 24	古	75 78 77 76	顧	127 121 128

其二							
平・陰		平・陽		上		去	
		盧	14	女	60 55	慮	107
疽	8 7 32			(咀)	83 69 61	覷	110 114
諸	3 34 2	徐	33	主	56 59 58 57	注	112 116 109 117
車	1 30 6 21	渠	31	樛	66 62 54	鉅	108 111 106

ㄩ(偃) 82

韻 母 平聲調 声母	5. 車書(入) 其一					
	平		上		去	
冰破梅	僕	48	卜	88 (瀑) 103	木	134
風無	ㄩ伏	44	ㄩ福	87	物	137
東天暖来	独	42	(督)	101 禿 84	● 禄	133
早從雪	族	43	(卒)	104 簇 86 速 85		
枝春上人	術	50	(畜)	100 東 94		
見開何一	鵠	45	谷	82 哭 83 忽 98 (屋) 102	○	

ㄩ佛 51 ㄩ拂 99

(入) 其二					
平		上		去	
				陸	135
俗	49	足	95 促 96 肅 93		
遂	46 〔林〕 53 蜀 47	粥	92 出 97 叔 91	辱	138
局	52	菊	89 曲 90 〔最〕 105	玉	136

いて独立した小韻としてあるが、「29A 𪛗」は周本では「25駭」小韻に収められている。朱本も「与駭同音」と記すべきであろう。

○ 上声

「41欸」「41A 凱塏鎧闔愷愷」の間の〔○〕印を誤りであると考えてこの二小韻を合併する。『正韻』上声六解「愷可亥切」小韻に「凱塏鎧闔」字を収めるが、「欸」字は去声六泰の「慨丘蓋切」にある⁽³¹⁾『広韻』においても状況は同じ。しかし「慨」字が現代北京音に去声の[k'ai]の他に上声の[k'ai]の音があるのを見るとき、「欸」字を「凱」小韻に合併するのも無理であるとはいえないであろう。

韻末に増補字「50A 噫北音也」がある。『広韻』上声十五海「徒亥切」小韻に「噫言不止」とある。定母・上声の字は近世北方方言においては去声に移るが、『広韻』同韻には「噫噫言不止他亥切」とある。「噫」は上声の字二字から成る疊韻の語であり、そのために「噫」字にも上声の音が残っていたと考えることができる。それを「北音也」といったのであろうか。

○ 入声作上声

「53客恪」「53A 刻剋克」の間の〔○〕印は誤りであると考えて両者を合併する。周本は「客刻」の小韻として扱うし、『正韻』も入声七陌に「客客格切恪恪剋剋」を収める。卓本は「49佰百栢」「57摯槩」の二小韻に分ける。前者は中古音・陌=韻幫母の字、後者は麥韻幫母の字であるが、朱本はこのような卓本の小韻のありさまをそのまま踏襲してそれぞれに字を増しているのである。

韻末に増加小韻「61嚇」がある。中古音は曉母陌=韻の字で、周本はこの一字のみから成る小韻を韻末に収める。

周本はこれに続いて更に「則」小韻を収める。

○ 去声

韻末に四つの増加小韻がある。そのうち「84慨」「85帥」は周本にすでに存在していた小韻であるが、「86噉尽闕也」小韻は周本にない。『正韻』去声六泰に「噉楚遇切、一舉尽闕」とある。

「86A 療脂疾」は卓本・周本とも「63瘞」小韻に収め、『正韻』も六泰に「瘞側賣切瘞瘞療療」のように収める。朱本は「与瘞字同」の注記を加えるべきであろう。

○ 入声作去声

韻末に増加小韻「90吃鳥声」がある。『正韻』入声二質の「吉激質切」小韻に「吃言驚」とあり、『広韻』入声九迄の「訖居乞切」小韻に「吃語難」とある。もしこの語であるとすれば、『中原音韻』などにおいては4 齊微・入声作上の[kɨ]となるはずである。しかし注解には「鳥声」とあり、この字が六泰階の韻においてどのような位置を占めるのかよく分からない(以下次号)。

韻母 聲調	6. 泰 階 其一				其二			
	平 · 陰	平 · 陽	上	去	平 · 陰	平 · 陽	上	去
冰 破 梅		排 12 埋 15	擺 35 買 33	拜 77 派 78 賣 75				
風 無								
東 天 暖 來	台 22	臺 23 能 16 駭 14	歹 49 詒 43 奶 50	帶 70 泰 64 奈 68 賴 76				
早 從 雪	哉 10 猜 26 腮 8	才 27	宰 42 采 45	在 74 菜 79 賽 81				
枝 春 上 人	齋 4 釵 18 (飾) 29	柴 19		寒 63 曬 80				
見 開 何 一	該 9 開 6 哀 24	孩 17 駭 25	改 44 欸 41 海 38 靄 46	蓋 65 慨 84 害 69 愛 66	偕 1 揩 5 埃 21	諧 2 崖 22	解 37 楷 40 蟹 39 矮 36	戒 71 懈 62 隘 67

其三			
平 · 陰	平 · 陽	上	去
(揣) 28 衰 11		揣 34	〔嘬〕 86 帥 85
乖 3		拐 48 蒯 47	怪 82 快 73 壞 83 外 72
歪 7	懷 13		

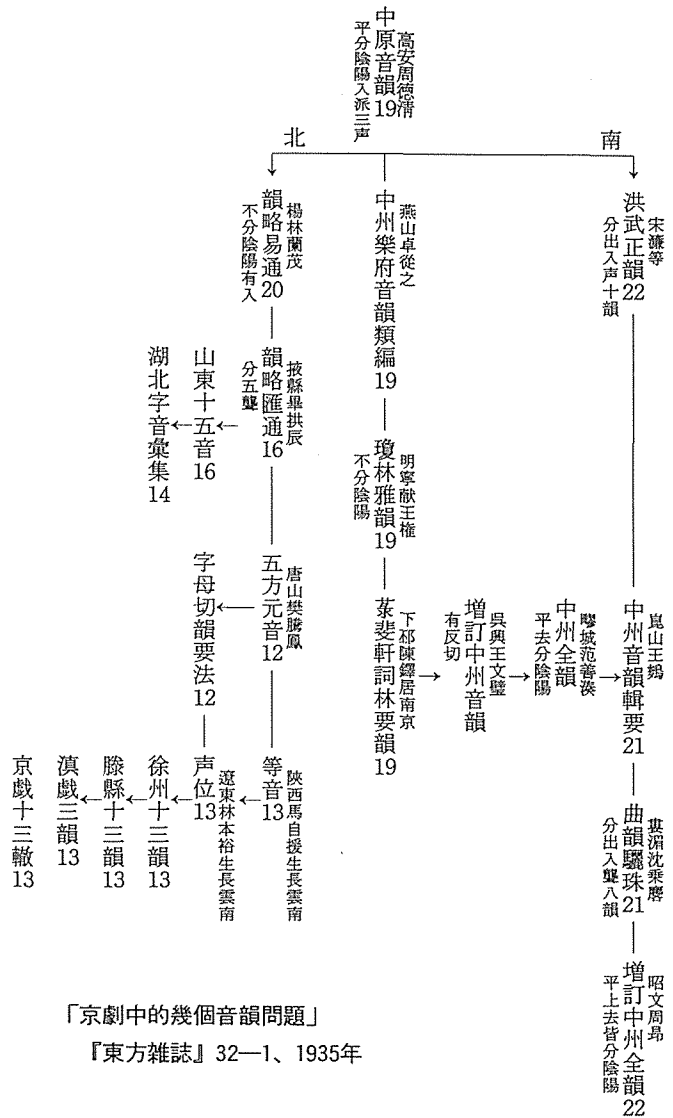
韻母 声母	6. 泰階（入） 其一		
	平	上	去
冰 破 梅	白 30	伯 51 拍 54	陌 87
風 無			
東 天 暖 来			擗 89
早 從 雪		●	
枝 春 上 人	宅 31	責 57 策 52 蹟 56	
見 開 何 一			

（入） 其二		
平	上	去
	格 55 客 53 （嚇） 61	額 88

（入） 其三		
平	上	去
	摔 60	
畫 32	餓 58	

注

- (1) 右図参照
- (2) 『明史』卷二・三太祖本紀及び、卷百・百一・百二諸王世表。
- (3) 『明史』卷四恭閔帝本紀。
- (4) 『明史』卷五成祖本紀、及び卷百十七諸王伝、寧献王の条。
- (5) 『列朝詩集小伝』乾集下、寧献王の条。なおここには「高皇帝十六子」とある。
- (6) 朱権の伝記資料としては上引の文献の他に『明史稿』卷百九・『国朝献徵録』卷一などがある。
- (7) 邵榮芬が「朱権は『瓊林雅韻』の序文において卓氏の『中州韻』に言及するのみで『中原音韻』に触れることはない。恐らく彼は『中原音韻』を見ていないのであろう」というのは当たらない(『中原雅音研究』1981年p.7. 注①)。
- (8) この書のみ佚するが、明代には通行していたらしい。王驥徳の『曲律』「論務頭第九」に、「涵虚子に務頭集韻三卷有り。全て古人の好き語を摘み、輯めて以て之を成したる者なり」とある。また李開先の「南北插科詞序」に「予少き時文翰を綜理するの餘に、頗る心を金元の詞曲に究む。凡そ中原・燕山・瓊林・務頭四韻書、太和正音・詞話・録鬼……其の品類を辨じ、其の当行を識らざる靡し」といい、「西野春遊詞序」に「其法は中原韻に備わり、其の人は録鬼簿に詳しく、其の略は正音譜に載す。務頭・瓊林・燕山等の集に至りては……」という(ともに『李中麓閑居集』卷六)。ここにいう「務頭」も恐らく朱権の『務頭集韻』であろう。因に「燕山」とは燕山の卓從之の『中州楽府音韻類編』であろうか。
- (9) 「『太和正音譜』曲論部分与曲譜非作於同時」(『文学遺産』1986年第6期)。
- (10) また朱権の編んだ琴譜『神奇秘譜』の自序には「洪熙乙巳三月一日麗仙書」とあるが、「洪熙乙巳」とは洪熙元年(1425)のことである。
- (11) 参考のために卓從之『中州楽府音韻類編』の韻目を掲げる。
- (12) 辻本春彦師の「洪武正韻反切用字考」(『東方学』13. 1957年)はこの点においても先駆的業績であった。最近は頼惟勤「『切韻』について」(『宇野哲人先生白壽祝賀記念東洋学論叢』1974年)に触発された平



「京劇中の幾個音韻問題」

『東方雜誌』32—1、1935年

- 田昌司「『刊謬補缺切韻』的内部結構と五家韻書（1）（2）」（『均社論叢』10、11、1981年、1982年）及び遠藤光暁「『切韻』反切の諸来源」（『日本中国学会報』41、1989年）などがある。
- (13) 更に小韻内の字も『中州楽府音韻類編』の配列順序の通りに並び、その末尾に増補字が加えられる例がある。たとえば、1. 穹窿、平声の第5小韻は「東冬凍凍」、第6小韻は「中衷忠終鍾鐘蝨」となり、末尾の「凍凍」「蝨」字は『中州楽府音韻類編』『中原音韻』いずれにも収められない字である。更に第6小韻内の字の配列順序は『中原音韻』では「鍾鐘衷衷終」となっていて大きく異なる。
- (14) 「中原音韻研究」巻上・第五章（『国季刊』3-3、1932年）。
- (15) 「『瓊林雅韻』について（上）」（『中国語学』235、1988年）。なおそこに示される「統計的調査」の「小韻数」は誤りが多い。
- (16) 『中州楽府音韻類編』は平声の内部を更に「陰」「陽」「陰陽」に三分する。これは『中原音韻』「正語作詞起例」の第八に「其韻内平声陰如比字、陽如比字、陰陽如比字」である『中原音韻』「墨本」と同じ内容を指し示していると考えられる。その「陰」とは同一声母の対応小韻を平声陽に持たない平声陰の小韻のことであり、「陽」とは同一声母の対応小韻を平声陰に持たない平声陽の小韻のことであり。一方、「陰陽」とは同一声母の小韻が平声陰・平声陽のいずれにも存在していて、陰陽のペアを成すものである。詳細は拙稿「中原音韻・正語作詞起例・譯注」（『均社論叢』8、1979年）及び「『中州楽府音韻類編』によって『中原音韻』に含まれる誤りを正しうるか」（『福岡大学、人文論叢』12-4、1981年）を参照されたい。
- (17) 拙稿「明・王文璧『中州音韻』の性格」（『均社論叢』5、1977年）、特に反切を整理した「総音作表」を参照されたい。
- (18) また陰陽の対を成す小韻を増補する際、それぞれ独立した小韻を設けている。1. 穹窿の平声の例を挙げれば、『中州楽府音韻類編』では「26胸」小韻が存在するのみであるが、『瓊林雅韻』は「34雄」を増補している。また11、簫韶の平声には同じく「抛」「豪」の小韻が並んでいたが、『瓊林雅韻』は「袍」「蒿」を増補して、それぞれ陰陽の対を成すように処理している。もし陰陽の区別がなく、これらが同音であるのならば、全書にわたるこのような増補は無意味なものであるといわねばならない。
- (19) 『瓊林雅韻』にもとづいて編纂されたと考えられる『詞林要韻』（一名『詞林韻釈』）は、（穹穹○窮蛩驚穹叩脚）のように配列している。この書については別稿を用意している。
- (20) 李新魁は「朱氏は周・卓の陰陽の区分を取り消し平声として一つにまとめた。これは恐らく『洪武正韻』の分け方を遵守したもので、のちに王文璧の『中州音韻』などの書が平声の陰陽を一類に合わせた先河を開くものである」という（『漢語音韻学』第四章第三節、1986年）。
- しかし、趙誠の以下のような見解は誤りである。「『洪武正韻』は南曲を作る際の参考とすることはできるが、結局は曲韻の専著ではないし、『中原音韻』は曲韻の専著であるが、南方の語音とは決して合わない。そこで南曲専用の韻書を編纂する必要がでてくるのであるが、最初にこの仕事をした人は明代洪武帝の息子の朱権であった」（『中国古代韻書』1979年）。
- (21) (uau) (ia) はもと入声字であったものが形成する音である。
- (22) 元代北方音を表わす『中州楽府音韻類編』を明代に増補した『瓊林雅韻』の音価を共時論的に論ずることの意味を考えると、中国の韻書における音価推定とは一体どのようなことであるのかと時に考え込んでしまうのである。
- (23) 後述するように朱本は1、穹窿の去声の部分、及び2 邦昌の平声の冒頭部分に欠落がある。卓本のその部分に確かに存在する小韻は1、穹窿の去声に16、2 邦昌の平声に1、をそれぞれ数えうる。
- (24) 股部四郎・藤堂明保『中原音韻の研究、校本編』1958年、の小韻番号による。
- (25) 拙稿「『中州楽府音韻類編』によって『中原音韻』に含まれる誤りを正しうるか」の試算による。
- (26) 趙蔭堂「始得瓊林雅韻校読記」（『中法大学月刊』1-4、1932）によれば、8167字、鈴木勝則「『瓊林雅韻』について（上）」によれば、8308字である。なお、三者とも1、穹窿の去声及び2 邦昌の冒頭の欠葉の個所は計算に入れない。
- (27) 前注（25）参照。

- (28) 4の「平入」及び「上入」はそれぞれ「去声作平声」の一字、「去声作上声」の一字を含む。また、14の「平入」は「上声作平声」の二字を含む。
- (29) 中古音（『広韻』）入声字と周本との対応関係については、上田金次郎「中古漢語の入声の変遷と北京語の破音の現象（一）、（二）」（『中国語学』52、53、1956年）及び「北京語における旧入声」（『高知女子大学紀要』6-2、1957年）に詳しい。
- (30) 唯一の例外とは、卓本では去声の第3小韻であった「貢」が『詞林要韻』においては第6小韻の位置にあるのを指している。また『詞林要韻』は韻末に二つの増加小韻「62鯨」「63銃」を有するが、そのうち「鯨」小韻は周本にも見えない。恐らく朱本、或は『詞林要韻』において増補したものであろう。
- (31) 朱本には「歟^歟」とある。『正韻』は「逆気」という『説文』に由来する注解を加えるが、『集韻』『附積文互註礼部韻略』『増修互註礼部韻略』『古公韻会挙要』などはすべてこの系統の注解である。一方『広韻』『五音集韻』は「歟^歟」という注解をもつ。朱本は後者によって注解を加えたのであろう。

(1991. 9. 13 受理)